

## アクティブ・ラーニングの方法をとり入れた 社会科授業の内容構成とその実践(2)

The Contents and Practices in Social Studies  
Including the Active Learning Methods (2)

荒井 真一

ARAI Shini-ichi

I aimed to realize advanced active learning at the teacher training seminar in Sapporo Otani University. I divided about 20 students into 4 groups. Each group studied the teaching process about the communities in Hokkaido.

A group studied about the city of Muroran in Hokkaido. The members of the group conducted a class for the students of the Sapporo Otani High School. The students of the High School wrote compositions describing their agreeable impressions to the class.

After the class I analyzed their compositions for framing the theory of active learning, and I got some indications for the framing.

### 1. はじめに

先稿において筆者は、アクティブ・ラーニング特集の1つとして、学科の特性を踏まえたアクティブ・ラーニングの内容について考察し、その成果を実践の経過とあわせて検討した。この検討の結果、アクティブ・ラーニングの手法を採用することにより、授業を聴く側ばかりでなく授業をつくる側の双方が主体的に授業に取り組むことが可能であることが推察された<sup>1)</sup>。本稿においては、これらアクティブ・ラーニングの手法に内在する一般的な原理の考察を、さらなる実践の経過の検討を踏まえながら行うことを目的とする。

文部科学省によれば、アクティブ・ラーニングとは「教員による一方

向的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称」と定義される。学習者が能動的に学習することにより「認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る」ことが可能になるという。このアクティブ・ラーニングには「発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習」等に加え、「教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループワーク」等も含まれる<sup>2)</sup>。

本稿においては、先稿における実践と同様に、社会科教諭免許状取得を目標とする札幌大谷大学地域社会学科学生とともに行った系列高校への出前授業の授業づくりと、授業実践の経過について述べることを前半の内容とする。そしてまた、この授業実践の場においては、授業に参加した9名の高校生たちから丁寧な感想を数多くもらうことができた。本稿の後半においては、これら感想文の記述を抜粋検討し、授業改善へ向けての指針およびこれら手法に内在する一般性について考察する。

## 2. 教職自主ゼミナールにおけるアクティブ・ラーニングの方法

札幌大谷大学地域社会学科では、2012年度における学科新設以来、教員免許状取得を希望する学生に自主的な学びの場を提供するべく、時間割に組み込む形で「教職自主ゼミナール」を開設している。このゼミナールの柱の1つは教員採用試験対策であり、学年進行に伴って採用試験の対象となる各科目を筆者が順次指導している。もう1つの柱は学生の実践的指導力の養成で、この目的のために教育委員会主催の学習ボランティアへの参加、オープンキャンパス時や系列高校学生に対しての授業公開などを行っている。

授業公開に際しては、入学当初に教職履修学生を4から6名程度のチームに分け自由に議論させ、その議論を踏まえて北海道にかかわる内容を課題とする授業の構想を提示させている。

学生によって示された構想が授業づくりに資するものとゼミ担当者である筆者が判断した場合には、授業の内容を考察させながら、必要に応じて実地の調査なども行わせた。これら調査においては、担当教員として筆者が同行する場合も数多い。

オープンキャンパス時の模擬授業と系列高校学生に対して行う出前授業は、いずれも30分程度の時間内で行うもので、基本的な違いはない。ただし、高校への出前授業は高校の授業時間の50分の枠内で行うので、残りの20分には筆者による教職課程の説明が挿入される。また、高校での出前授業では、高校教員のお力添えで高校生による感想が集められ、筆者及び学生に手渡される。これら感想の存在は、授業の成否や改善点等を考察する際に貴重な資料となる。

### 3. アクティブ・ラーニングとしての系列高校への出前授業

#### 3.1. 出前授業「ものづくりのマチ室蘭～白鳥大橋～」の

##### 教職自主ゼミナールにおける位置づけ

札幌大谷大学地域社会学科では、2012年度の学科開設以来、オープンキャンパスや出前授業といった他の方と交わる場において、教職自主ゼミの学生（基本的には1年生を対象としている）たちに対して年に数度の公開授業の舞台が提供されている。2012年度には、教職自主ゼミに所属する学生（学科において教職課程を履修する学生と同じ）全員に授業の機会を与えることが可能となった<sup>3)</sup>。2013年度および2014年度入学生についても、若干名を残しているが、過半数の学生に公開授業の機会を提供している。2015年2月時点で行われた公開授業を表にまとめれば以下の表1のようになる。

表1 教職履修学生による公開授業一覧（「O.C.」はオープンキャンパス）

| 年度   | テーマ                        | 舞台   |
|------|----------------------------|------|
| 2012 | 「カントリー・サインから読みとく北海道」       | O.C. |
|      | 「貿易を通して TPP を学ぶ」           | O.C. |
|      | 「タイムスリップ・イン・バブル」           | O.C. |
|      | 「北海道の経済について考える ～余市とニシンから～」 | O.C. |
| 2013 | 「ジンギスカンと北海道」               | O.C. |
|      | 「道の駅紀行 -道の駅から学ぶ地域性と特色-」    | 出前   |
|      | 「札幌ラーメン不思議発見」              | O.C. |
| 2014 | 「製糖業から見る十勝」                | O.C. |
|      | 「十勝の生産物から経済学を考える」          | O.C. |
|      | 「ものづくりのマチ室蘭～白鳥大橋～」         | 出前   |

今回本稿で取り上げる公開授業「ものづくりのマチ室蘭～白鳥大橋～道の駅紀行 -道の駅から学ぶ地域性と特色-」の授業者は、2013 年度入学生佐藤まな（リーダー）、2014 年度入学生川緒遥・曳地花梨・神崎冬夢の4名によるチーム（まなチーム）である。まなチームによる授業は、普段学生たちが生活する札幌とは異なる自然環境や経済構造を持つ地域に着目することで多角的にまちづくりをとらえる視点を養おうとの目標を、課題設定の出発点としている。北海道有数の工業都市である室蘭市は、このような課題設定のもとで実践の対象となった。

学科における年間行事のスケジュールは、年度ごとに異なる。それゆえ、オープンキャンパスの場で公開授業を行う回数が2013年度以降若干減少した。しかしその一方で、高大接続の一環として、2013年度と2014年度には系列校である札幌大谷高校での出前授業が行われることとなった。前節でも述べたが、出前授業の場では高校生から真摯な感想をもら

うことができた。それゆえ、まなチームによる公開授業は、他の公開授業よりも授業課程の検討を行うことが容易である。

### 3.2. 出前授業「ものづくりのマチ室蘭～白鳥大橋～」の概要

本節では、まなチームによって行われた公開授業の骨組みと内容を、実際に用いられたパワーポイントのスライドを抜粋しつつ述べる。

授業を聴く高校生たちに室蘭という都市について理解してもらうための中心的な事柄として、まなチームでは関東以北最大のつり橋である白鳥大橋を設定した。授業の冒頭ではまず、室蘭市の位置と概要について、下図のスライドを用いつつ説明した。



図1 「ものづくりのマチ室蘭～白鳥大橋～」のスライド 03, 04, 06, 07

工業都市としての室蘭の特徴を確認した後、授業では室蘭湾にみられ

る特徴ある地形について説明しつつ、都市としての発展のためにこの湾を横断する橋が必要であったことを述べた。

|  |   |
|--|---|
| <p style="text-align: center;"><b>日本でも珍しい地形</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>山坂多く都市らしくない都市<br/>⇒都市<br/>「ある地方の政治、経済、文化の中心として<br/>大きいまち」⇒ 札幌など</li> <li>日本でも珍しい海に突き出た半島</li> <li>しかもその半島は“湾曲”している</li> </ul>  | <p style="text-align: center;"><b>白鳥大橋ができるまで</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>北海道開発局室蘭開発建設部初代部長 猪瀬寧夫</li> <li>「ここに橋があれば・・・」</li> <li>昭和30年(1955年) 提唱</li> </ul>  |
|    | <p style="text-align: center;"><b>そして今の白鳥大橋がある・・・</b></p>    |

図2 「ものづくりのマチ室蘭～白鳥大橋～」のスライド 09, 11, 12, 14

さまざまなスライドにより白鳥大橋の雄大さを実感してもらった後に、橋の全長が1380メートルで、海面から60メートルの高さにあること、主塔の高さが（さっぽろテレビ塔とほぼ同程度の）140メートルほどあることなどを述べた。

上の説明の後、このような巨大な橋がどのように作られたかについて説明を行った。この説明を通して巨大建築を可能とする技術の具体例について理解を深めてもらうことが、この授業における目標であった。

白鳥大橋の基本的な構造は単純である。海上に設置する2本の主塔の上に2本のケーブルを架け、それらケーブルを陸上につくられたアンカ

レッジと呼ばれる部分で固定した後、ケーブルから多数の橋板を吊り上げて連結すればよい。授業においてはこれらの基本的な構造を踏まえつつ、白鳥大橋下に建設されている道の駅「みたら室蘭」2階に展示されている写真および学生による撮影写真等を用いて具体的に説明した。

これら説明においては専門的な用語の登場する回数がやや多く、説明では若干難しいように感じられた。しかし学生たちはそのような気配を感じ取ったらしく、事前のリハーサルではみられなかった橋の構造図を板書し高校生たちの理解の促進を図っていた。



図3 「ものづくりのマチ室蘭～白鳥大橋～」のスライド 20, 22, 24, 25

白鳥大橋の構造についての説明の後、大橋完成後の室蘭市における成果についてのまとめが示され、大橋建設の意義が総括された。この総括の後、地域社会学科のねらいとする地域理解の方法について、高校・大

学の位置する札幌市東区を例とした説明を付加して授業の末とした。

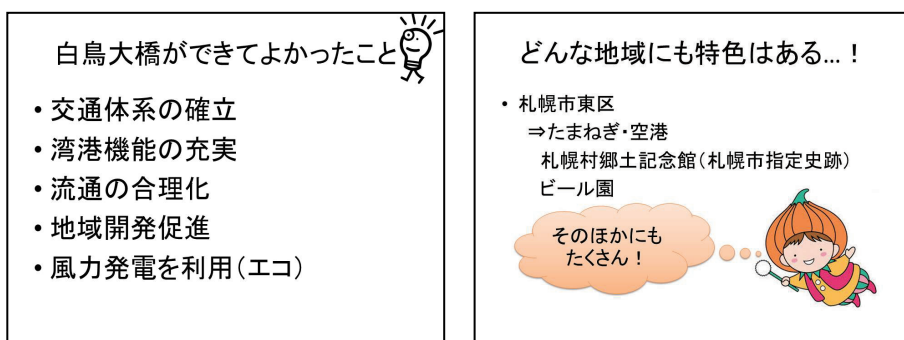


図4 「ものづくりのマチ室蘭～白鳥大橋～」のスライド 29, 31

#### 4. 出前授業の成果と今後の課題

以下本章では、構成に沿った形で高校生からいただいた感想文記述を抜粋検討する。感想文を寄せてくれたのは札幌大谷高校の2年生9名である。各々の生徒には(A)から(I)という記号を付した。他の教員による出前授業が並列で行われているため、この授業は1クラスの人数には満たない数となっている。

授業の成否を検討する上で欠くことのできない要素は、さまざまな事柄について学ぶことができたという授業に対する満足度だろう。この満足度という点に関して、授業に参加した全ての高校生から以下のような感想文記述が得られた。

- ・室蘭について、食べ物や有名なものなどについて詳しい説明や写真があってわかりやすかったです。(A)
- ・写真がたくさん出てくるのはわかりやすかったし面白かったです。食べ物やボルタくんなど、前までは知らなかったことも聞くことができて楽しかったです。(B)
- ・室蘭について、有名な食べ物や白鳥大橋について、何も知らなかつ



たことを詳しく知ることができ、またいろいろな例を出して説明していただいたので、わかりやすかったです。(C)

- ・今日学生さんの授業を聞いて、すごく勉強になったし、とても楽しかったです。室らんのグルメや特徴などを、写真や映像を使ってとてもわかりやすく説明してくれました。(D)
- ・今回学生交流ということで授業をうけて、まずまなさんの授業は写真や映像を見ながら説明を聞いたので理解を深められたと思います。(E)
- ・今回の授業を受けて、室蘭のことについてたくさん学ぶことができて良かったです。(F)
- ・室蘭は行ったことがなかったし、室蘭についての知識も少なかったもので、たくさん学ぶことができました！！(G)
- ・最初はどんな感じなのかあまりわからなくてつまらなかったら嫌だなど思っていたのですが、教室に来て下さった時から明るく元気に接して下さって安心して聞けましたしすぐになじむ事ができて良かったです。内容もスクリーンを使って画像や動画で1つ1つ丁寧に教えて下さってわかりやすかったです！(H)
- ・室蘭について、今回たくさんを知ることができました。白鳥大橋の作り方など、今までに考えたことはなかったのですが、今回聞いてみてすごい考えられて作られているんだと思いました。今回のことをきっかけにたくさんのことについて調べてみたいりたくさんものを食べてみたいです。(I)

しかし前章で述べたように、白鳥大橋の説明に関する説明が若干難しいように感じられた。筆者のこのような危惧は、以下の感想文記述にあらわれていた。

- ・白鳥大橋は、黒板の絵がわかりやすく、言葉だけではよくわからなかったのですが、図や絵があると理解しやすかったです。(A)
- ・白鳥大橋の説明をしてくれたのですが少し分かりにくかったです。休憩後に黒板に絵で説明してくれたことにより理解できました。ですので、黒板に書いて説明してくれると、私達は目で見て耳で聞いてより印象に残る気がしました。(E)
- ・橋についてのお話が少し難しかったのと、資料の行き来が多かったなどと思いました。ですが、分かりやすく説明してくださっていたので楽しかったです。(G)

上の記述にみられるように、筆者の危惧は的を得ていたようであった。授業改善の方向性として、橋の構造説明の明確化が求められるだろう。ただし、以下のような記述もみられたので、同様な記述の割合が高められる必要がある。

- ・一番印象にのこったのは室らんの白鳥大橋の作り方です。最初つり橋と聞いたとき、どんなふうにするのか想像もつきませんでした。でも写真とかで説明を受けたら、なるほどと思ってすごく納得しました。つり橋についてのモヤモヤが一気に晴れた気がしました。(D)

以上のように授業の成否はおおむね良好と思われた。一方本論においては、アクティブ・ラーニングの手法にみられる一般性を導き出すことも狙いとなっている。

先稿においては、授業者（大学生）たちに対する共感的な理解を踏まえた受講者（高校生）たちの意識の変容のさまが、高校生たちの感想文記述から導かれた。今回の感想文記述からも、先稿と同様に、以下のような感想文記述がみられた。

- ・焼き鳥やカレーラーメンなど食べてみたくなりました！ (A)
- ・白鳥大橋を提唱して、その4年後から造り始めて、という、市民の意見を尊重して実現したものだから、大変だったんだろうなと思いました。(B)
- ・今まで橋ってどうやって造られているのだろうと思っていたのですが、今回の授業で、橋を造るのにどれくらいの期間がかかるのか、どうゆう手順で造られているのかなど映像と説明でよく知ることができました。(C)
- ・私もどこかご当地についていろいろ調べてみようかなと思いました。いろんなことを調べて画像とか映像を作るのは楽しそうだなと思いました。(D)
- ・私達授業をうける側として分からないことがたくさんあるのですがそれを分かりやすく説明するのは難しいと思いますがこれからもこういう機会があればいいなと思いました。(E)
- ・私はまだ1度も室蘭に訪れたことがないので、もし何かの機会に行くことができたなら白鳥大橋を渡って今回教わったことを意識して少し視点を変えて見るのができたなら良いと感じました。(F)
- ・内容や説明だけではなく実際に行ってどうだったとか、こんな事があったなど自分達の感想も述べて下さって資料だけではわからない事も伝わってきて想像しやすかったです！(H)
- ・私は、おばあちゃんの家が室蘭にあるので知っていることもあれば知らないこともありすごく良い経験ができました。(I)

授業づくりを行う過程において、学生たちは必ず彼らの問題意識に沿った実地調査や特産品の試食などを行っている。これら学生らによる経験は、彼らの作成する授業の中に何らかの形で反映する。上記感想文記

述をみるに、授業づくりの過程で大学生らが経験した事柄に対して高校生たちが敏感に反応しているように思われる。アクティブ・ラーニングの方法は学生たちに主体的な学びを行わせることを狙いとしたものであるが、このような主体的な学びを踏まえてつくられた内容は、授業に参加する者の主体性を刺激する働きももちうるように感じられる。

本稿においては上に述べたような“主体的な学びの連鎖性”を授業における1つの一般性を示しうる仮説として提起し、今後の授業研究における指針としたい。

上に挙げた共感的な理解という点に関して、社会科教育においては、「共感的なわかり方」が論理的思考につながるものとの仮説が示されていた<sup>4)</sup>。この「共感的なわかり方」に関しては、その適応範囲において検討すべき点が残されている<sup>5)</sup>。今後は“主体的な学びの連鎖性”と「共感的なわかり方」の関わりについて、学生らによる主体的な学びを実現させながら、それら学びを踏まえたアクティブ・ラーニングにおける理論的な枠組みについて考察する。

#### [註]

- 1) 荒井眞一「アクティブ・ラーニングの方法をとり入れた社会科授業の内容構成とその実践」『札幌大谷大学社会学部論集』第2号, 2014. 3. 31, 82ページ
- 2) 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」『用語集』, 2012. 8. 28, 37ページ  
([http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf))
- 3) 2012年度に行われた公開授業の概要は、『地域を学びの場とした教職実践のあゆみ 第1号』（札幌大谷大学社会学部地域社会学科編・著, 2012）にまとめられている。
- 4) 白尾裕志「第58回埼玉大会 社会科の学力と教育課程分科会報告」『歴

- 史地理教育』歴史教育者協議会，2006. 11 月増刊号，80 ページ
- 5) 荒井眞一「社会科における学力の形成」『学力と教育課程の創造』同時代社，2013. 8. 9, 52 ページ

[引用文献]

- ・荒井眞一「アクティブ・ラーニングの方法をとり入れた社会科授業の内容構成とその実践」『札幌大谷大学社会学部論集』第2号，2014. 3. 31,
- ・中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」『用語集』，2012. 8. 28
- ・白尾裕志「第58回埼玉大会 社会科の学力と教育課程分科会報告」『歴史地理教育』歴史教育者協議会，2006. 11 月増刊号
- ・荒井眞一「社会科における学力の形成」『学力と教育課程の創造』同時代社，2013. 8. 9

(あらいしんいち 札幌大谷大学社会学部准教授)